



女性の視点

20ミリオンプラス1 のハートを込めて



尾形 玲子

「♪ブンブンブーン蜂が飛ぶ～、お池のまわりに野バラが咲いたよ～♪」と自己紹介代わりに下手な歌を歌う私はハチ屋稼業。

たくさんのミツバチを飼い、ミツバチが生産してくれるハチミツ・ローヤルゼリー・プロポリスなどを採集する「養蜂業」です。意外かもしれませんが、養蜂業は畜産業のお仲間に入れていただいています。牛・豚・鶏などとは違いミツバチは小さな体の昆虫ですが、ほかの畜産動物にも負けないくらいにその働きは優れたものがあります。

ハチミツなど栄養たっぷりの自然食品を生み出してくれることはもちろんですが、イチゴ・メロン・サクランボなどの多くの果物や野菜までもミツバチの＜花粉交配＞の働きがなければ、良い実が結実できないのです。そう、ミツバチは現代農業を支える“縁の下の力持ち”的な存在なのです。

日本でも＜蜂不足＞が深刻となりミツバチの働きの良さや必要性がクローズアップされ、その存在価値が認められるようになってきました。事実、農薬・環境悪化・ダニの発生・異常気象などミツバチを飼育しづらい自然界になってきていて、自然や生き物に向き合う難しさを感じています。「何年やっても勉強だ」と言っていた父の言葉が身に染みます。

自然状況の悪さは採蜜にも大きく影響します。ミツバチがいっぱいの良い蜂群を育てる

こと・蜜をふく花が豊作であること・ミツバチが働ける適温の良い天候であることと3拍子も4拍子もタイミング良くそろわないとハチミツは採れません。

人工的に作れる物ではなく、本当に自然の恵みですので、ハチミツが溜ってきて巣がキラキラ輝き出すと本当に嬉しくなります。日々蜂の世話を頑張って（良い蜂群にするには、女王蜂がよりたくさんの卵を産む環境を整えてあげることです）、あとは自然の巡りが良いよう毎シーズン祈っています。

振り返れば私の人生はずっと蜂とともに過ごしてきました。青森県で生まれた父が戦後食糧難で甘い物など非常に貴重で憧れの品であった時代、地元の養蜂家の下で修業し、「ひふみ養蜂園」として独立。私は二代目です。

ミツバチは寒さに弱い昆虫ですので東北地方に雪が舞う寒さが訪れる前に寒さを逃れ温暖な千葉県に連れてきて越冬させ、春の訪れとともに「桜前線」を追いかけるように、今度は蜜源の花を求め北上します。（移動養蜂）

私たち家族も所帯道具一式を持ち、その土地土地で宿を借りて、たくさんの方にお世話になりながら花を追求めるジプシーのような生活をしていました。現在では高速道路などの交通網も整備され、車で約1日もあれば移動できてしまいましたが当時はモクモク煙を吐く貨車に何よりも大事な蜂の巣箱を積み込

み、何日もかけて蜂が死なないう気を配りながら移動していまし



一生懸命働いている元気なみつばち



ミツがいっぱい溜まったミツ巢の採蜜作業

た。見ず知らずの養蜂一家を受け入れ親切にしてくださった人情ある方々に支えられたのだと、父は生涯恩ある方々へ感謝し続けていました。

その頃のことで私に強く残る印象は、トチ蜜やローヤルゼリーを採るために初夏の青森の十和田の山中で電気も水道もないテント生活をし、ブナの薪で煮炊きをし、ワラビなどの山菜を摘み、放牧の牛が怖かったりと大自然の中でアドベンチャーファミリーのように過ごし、私は川に洗濯に行くたびに、ドンブラコ・ドンブラコと桃太郎の入った大きな桃が流れてくるんだらうと思ったりしていました。そんな風に蜂とともにあちこち巡り大自然の中で育った私ですが、まさか自分が養蜂家になるとは夢にも思わず、むしろ蜂は苦手でした。

養蜂は美しい花畑に巣箱を置く「ハニーハンター」と夢のある仕事のようにですが、実際は3K4Kの重労働です。父が年を重ね体力的に厳しい状況にもかかわらず、手伝いの人たちは長続きせず、見かねて私が助け始めました。重労働に加え蜂に刺されると痛いとしブシブ手伝っていた私ですが、次第にミツバチの能力の高さや働きぶりに感心させられるようになってきました。今では、よく取材等で「蜂は可愛いですか？」と質問されると、「私は蜂を尊敬してるんですよ」と答えるようになりました。「男のロマン」を追い求め「生涯一養蜂家」であった父のように、キライだったはずの蜂への思いは逆転して「女のロマン」を求めているのかもしれません。

ミツバチは人間にはない鋭敏な感覚を持ち人間には到底作り出せない物を生む能力に優れ、限りある命の中で陰日向なく懸命に働き花蜜や花粉を求め常に前に前に飛び進んでいます。春に女王蜂の産卵がグンと増え働き蜂たちはそれを守り育み、巣箱の中には生命力が溢れ、子孫を残し命を繋ごうとする姿に素晴らしいと感じるのは、私の持つ母性のせいかもしれません。

その素晴らしい働き蜂は実はメスなのです。まさに女王蜂を中心とした女性社会なのです。ひふみ養蜂園第一の自慢のハンサムウーマン！

命を生み守り育てる畜産業は体力的に大変な面はありますが、女性の愛情力や感性が不可欠なのかもしれませんし、今ピーピーと吹いてくる逆風のピンチをチャンスに変えられるのは、女性のしなやかさかもしれません。ずっと山の中の蜂場で汗を流し働き続けてきた私に、今夢があります。NPO法人いきいき畜産ちばサポートセンターやさまざまな方の協力を得て、六次産業化に向け始動しました。

ミツバチの顔を見たことがありますか？ハートフェイスなんです。巣箱の中にはハートがいっぱいです（一箱に約2万匹）当養蜂園の2000万匹のミツバチたちのハートと私のハートを込めて互いに輝きながら頑張っていきます。澄んだ青空の下、どこからともなく素敵な花言葉（志の高い人）をもつキンモクセイの良い香りが漂い来て秋となりました。

（おがた れいこ・千葉県館山市ひふみ養蜂園(株)代表取締役）